

第16回京都文化芸術都市創生審議会 摘録

日時 平成28年11月17日(木) 午後6時～8時

場所 京都芸術センター講堂

出席委員(敬称略):

池坊専好会長, 潮江宏三副会長, 井上八千代委員, 栗山圭子委員, 佐野真由子委員, 清水重敦委員, ジョナ・サルズ委員, 杉本歌子委員, 建畠哲委員, 田中誠二委員, 寺井友秀委員, 西村朋子委員, 畑正高委員, 湯浅靖代委員, 鷺田清一委員, 藤田裕之委員

※政策部会出席委員: 臼井喜法委員, 河島伸子委員

事務局:

平竹耕三文化芸術政策監, 北村信幸文化事業担当局長, 木咲圭二文化事業推進部長, 土橋聡憲文化財担当部長, 山本ひとみ担当部長ほか

1 開会

2 議事

第2期 京都文化芸術都市創生計画(案)について

3 意見交換

別紙のとおり

4 閉会

(別紙) 意見交換摘録

<会長>

前回の審議会で次期京都文化芸術都市創生都市計画の策定について京都市長から諮問を受けており、具体的な論議については、政策部会を設けて検討することになっていた。そこで検討された成果がお手元にある。計画案の内容について、政策部会長のから、御説明をお願いします。

<政策部会長>

(資料1の第2期京都文化芸術都市創生計画(案)を説明)

最初に、世界文化自由都市宣言を置いた。昭和53年に京都市が宣言したこの素晴らしい宣言は当時先鋭的なものであったと思われるが、まさに今も、新しく素晴らしい内容が含まれているということで、最初に置くことにした。

P12~13に世界文化自由都市宣言の下に展開している政策構造図がある。世界文化自由都市宣言は京都市の全体計画を覆うものとして位置付けられる。右側のページが文化政策に関わる部分で、これらは御存じのように京都文化芸術都市創生条例に基づいて進められており、現在私どもが議論しているのが第2期の創生計画だ。この創生計画対象期間の半ばが東京オリンピック・パラリンピックや文化庁の京都移転の時期に当たる。今はあたかも全てがこれに向かっているかのように見えるが、本創生計画はその時期を越えて、それ以後も見据えた10年間の長期計画であることを意識して検討した。

P16~17が今回御提案する計画案の基本構造図だ。基本構造を割り出すのに、政策部会では大変時間を掛けた。具体的な個々の施策を一旦捨象して、文化政策の大きな目標と基本構造を抽出することから始めた。そして基本方針として、10年後ありたい京都の姿として、「成熟した都市文化を基盤に新しい文化を創造し続けるまち」を掲げた。成熟した都市文化という表現には、歴史を重ねたという意味ばかりでなく、多様な歴史的背景、多様な文化的背景、多様な人々が重層的に共存していることを含意している。基本方針の下に方向性1~4があり、横並びに4つの軸があるというより、1から4に展開していくストーリーとして表現している。方向性1の暮らしの文化からストーリーが始まること、暮らしの文化を基本に置くことが政策部会からの大変重要な提案だ。後のページに各方向性についての説明がある。方向性1の中でも、「五感で感じる文化的景観」という概念が重要なポイントであり、文化財用語としての文化的景観よりも広い意味で使っている。

そして方向性2の最高水準の文化芸術活動を花開かせる、というところにつながっていく。さらに、方向性3の「文化を基軸にあらゆる政策分野との融合により」というところに新しい考え方を打ち出している。これは行政の縦割りの中での狭い意味で

の文化ではなく、あらゆる分野の政策に文化が関わっているという考え方を打ち出したものだ。文化を中心においた総合的文化政策を打ち出したい。これも政策部会の議論で重要なポイントになった。そして、全てを踏まえて内外の文化と広く交流して、京都を文化交流の舞台にしていくというのが方向性4である。

各方向性の下に具体的な施策が並ぶ。全ての施策を4つの方向性の下に配置し、読む人にストーリーが分かりやすく伝わるようにしている。京都だからこそ文化を中心にした総合政策がありうるのではないかと考えている。

<委員>

今回の政策部会では、暮らしの文化、暮らしの中に根付いてこそ文化だということが一番の柱だった。五感で感じる景観、町を歩いていて文化が匂い立つようなこと、ここで暮らしていることが私達の誇りであったり、これから育っていく子ども達に伝えるべきことであると考え、そのことを組み立てた計画案になっている。

<委員>

今回の計画の出発点として、他都市でもできる計画ではなく、京都で計画をたてるのに何が必要なのかということを検討し、その結果、政策部会長が説明されたような内容になった。文化的景観という言葉については、文化財分野の新しい用語として出てきたものだが、今回は文化財分野の用語ではなく、もっと広い意味で、京都の景観は人々の暮らしの中から出てくるものであって、人々の暮らしと結果として出てくる景観を併せて文化的景観ととらえ、文化政策全体を覆うような概念として使っている。

<委員>

古典音楽の実践も行っているが、京都はブランド感があって伝統芸能が一見ふさわしい町のように見えるが、伝統芸能の世界では若い人が食べていけない、工芸、美術の世界でも同じかもしれない。文化を生み出す土壌があるはずなのだが、うまく若い人を引き付けるには至っていない。ここで芸術活動をしたいと思う人が満足できるような環境を創っていかねばならないと常々考えている。実演の分野で言うと、京都はマーケット自体が小さいと言われる。少なくとも若い人が納得して飛び込める文化環境がほしい、それが生活の中、暮らしの中に文化があふれているような環境になるのかなと思う。

<委員>

政策部会長がピックアップされたところがまさに部会の議論で強調されたところで、五感で感じる町という考え方も部会の議論の中から生まれたものだ。そういったことが表現されている文章になってよかったと思っている。

文化庁の文化審議会，文化政策部会に関わっている関係で少し補足すると，文化庁の京都移転を京都では好意的に追い風と捉えているが，文化庁の政策部会の論議では危機感を持つ意見もある。移転に伴って文化庁の機能強化をすることが謳われているが，京都に移ることは文化行政の地位低下につながるのではないかと，文化財の豊富な京都に移ることはあまりにもっともすぎて地方創生につながらないのではなどとネガティブな意見も出ていた。京都市としては，全国に対して地方文化行政のモデル，暮らしに根付いた文化から福祉政策までを含む総合的な文化政策を示して，文化庁が京都に移転してきてそれを目の当たりにしたときに，京都はここまで地方文化行政ができるのか，京都市に移転して本当に良かったと思わせるぐらいの意気込みで取り組むべきだと思う。

<会長>

計画の構造や方向性が展開していく様子，従来とはちがった点，暮らしの文化など，分かりやすく明示されていて，輪郭のはっきりした案になっていると思う。

次に事務局から，その他の点について御説明をお願いします。

<事務局>

資料2 概要版について説明

<会長>

はじめに欠席委員からの御意見の紹介をお願いします。

<事務局>

欠席委員からの意見の紹介。

「方向性4につき，本冊の3ページの冒頭に，『京都は1200年の間，外からの刺激を受け入れ，咀嚼し，絶えず新たな文化を創造し続けてきた』という趣旨の文がある。43ページの方向性4の説明では，この趣旨をふまえ，『内外との様々な文化交流を通じて，多様な文化を寛容に，柔軟に取り入れ，それらを咀嚼し，変化を恐れず文化の裾野を広げ深めていく』という観点を少し盛り込んでどうか」

<委員>

暮らしに焦点が当たっていて，生活に根付いた文化という文言が出てくるが，京都のどういったところを指しているのかをもう少し詳らかにしてほしい。というのは，京都のほとんどの方が，いわゆる観光客が期待されるような暮らし，それは江戸期や明治期の暮らしになるのかと思うが，そんな暮らしをしていない，畳のある住空間で暮らしている方もほとんどいないという現状で，生活に根付いた文化をどのように捉

えたらいいのかと思う。また、地域に根差した暮らしの文化という表現についても、京都市も地蔵盆を守っていこうとしているが、地域に根差した暮らしの文化が何かという信仰というものにぶち当たる。京都には豊かな信仰の世界がある。また京都という昔のこと、過去が連想されるが、過去が今の私達に線としてつながってきているという実感、時空のクロスマッチをする場としての京都が大切だと思う。それが創生計画案を見て私が感じたことだ。

<委員>

私は美術館畑なので文化施設についてだが、計画案では、方向性 3 に京都市美術館の整備や京都市立芸大の移転について書かれている。あまり言われないことだが、京都の文化施設は、ある意味では国に頼ってきたと言える。京都には国立博物館、京都国立近代美術館、国際会議場、国際日本文化芸術センター、地球環境研究所などがあり、金沢 21 世紀美術館や愛知芸術文化センターみたいな投資はしてこなかったことが気になっていた。今回の計画案では、京都会館や京都市美術館が新設ではなく改修によって、京都市立芸大が移転によって新しく展開していくことが挙げられている。ローマシアター京都は成功していると思う。必ずしも新しい巨大な施設を創るということではなく、既存の施設の再整備ということで進んでいくということが大変良い方向性だと思う。

<委員>

まず政策部会の皆様に御礼を申し上げます。お話を聞いて、私の感想として、これからの都市は経済や建造物ではなくて、文化芸術が活力のある創造的な都市を創っていくということを実感した。そして豊かさというものが、物質的な豊かさもあるが、文化芸術から育まれた心の豊かさを市民が享受することが大きいということも感じた。今回、創生計画が誰に向けられて発信されているのかを考えたときに、市民目線で分かりやすく、文化芸術という少し敷居が高かったところを見事に市民目線で、暮らしの中で文化を育み、市民のプライドも含めて、スパイラル状にダイナミックに発展していくことが表現されていると思った。

文化財のあり方も保全から活用へ転換されたということだ。そのことが五感で感じる京都の景観になっていくと思った。ここまで見事に描かれているので、これを市民に浸透させていくために、例えば市民憲章などに、あらゆる目に見えるところに、文化でまちづくりをしていくということが表現されてもいいと思った。

<委員>

「成熟した都市文化」という表現がキーワードになっているが、単なる「古都」でない爛熟して落ちてしまわない都市、成熟した都市を維持していく持続可能性が京都

文化芸術都市創生計画の奥に潜んでいると思う。文化をしっかりと守っていくとともに、多くの市民がそれを守りつつ、担い手、つなぎ手として立ち現われてくるような都市であってほしい。それを京都市が音頭をとってというのではなく、市民の中から生まれてくる、そのような創生計画でありたいと考えている。

<委員>

政策部会の皆様にお礼申し上げます。計画案の動脈については異論はない。毛細血管あるいは土台の基礎のところを感じることを申し上げます。危機感を感じるのは、町家の数が年間数百軒減っている、着物の売り上げが激減している、西陣の職人が亡くなって大切な技術が失われる、日常に根差す京都の文化が失われていくということだ。京都の文化と言うと、自然への畏敬の念、木と水の文化、その中から紡ぎだされた季節感だと思うが、町家とか井戸水、根底となっている生活がなくなることによって、文化が無くなってきている。根源的に守っていかないと、あっという間になくなってしまふ。文化芸術都市を創生していくために、その基本となっている根源的にあるものを守っていくことが重要だと思う。懸念するところを感想として申し上げた。

<委員>

一般市民としての感想になるが、北海道出身で東京にあこがれていたが、京都の何かの魅力に惹かれてもう10年京都に住んでいる。その魅力を言葉で表現できなかったが、五感で感じる文化的景観というのが自分の中にあると感じる。また、今でも東京に憧れて制作している若者がいて、この計画がうまく浸透して、若いアーティストにうまく働き掛ければ、京都はもっと刺激的ないいまちになるだろうと思う。今回の計画案を読んで、心が浮き立つような感じを持った。さらに市民にうまく浸透していけば、いい計画になるだろうと思った。

<委員>

計画案をまとめていただいた政策部会の委員の皆様には敬意を表したい。東京オリンピックや文化庁移転の先を見据えて考えているということも心強く思った。細かいことで気が付いたことだが、子どもが文化芸術に触れる機会を創出するとあるが、総花的にみんなに機会を提供することだけではなく、施策21番に書かれている京都市少年合唱団の活動実績や歴史を良い事例として学び、その次の段階を準備することも大事なことだと思う。

46 ページの「本市職員の文化力を高めるための取組の実施」は活字にしてもいいのかどうか。書くのなら「文化的発信力を高める」にしてほしい。アウトプットの力は本当に必要だろうし、率先してやっていただければ、次の世代も、市民も付いていくと思う。

二条城の取組のお話があったが、私も感激した。あの説得力は寛永文化という切り口にこだわったところにあったと思う。単に京都らしいものという展開では、ちがうものになった。歴史文化にこだわって、それを研究して表現するということができるというのが京都であって、東京にはないことだと思う。

個人的な体験だが、東京でハレとケという言葉が通じなくて愕然とした。この計画案にしても私達は何の苦も無く理解するが、一步京都の外へ出ると通じないということがあり得る。それぐらい世の中は一般化されて薄められたものになりつつあると感じる。

五感で感じるという表現が入っているのは嬉しいことだ。「春はあけぼの・・・」は京都の東山のことを表現しているが、皆さんが天気予報をお聞きになって、明日何時ごろに起きたら「紫だちたる雲」が見えるのか、といった感性を持ってほしいと思う。

<委員>

伝統工芸のPRに関わっている。伝統産業において若手が食べていけないという現実がある。若手が今の仕事をやめないで続けていけるようなケアをお願いしたい。市民の立場からは、市民目線で見やすく分かりやすい文言で仕上げてくださいようお願いしたい。

<委員>

一見、網羅的にあらゆる事が書いてあるように見えるが、丹念によく読むと、暮らしという視点、子どもつまり未来の文化の担い手という視点、3番目に文化を文化行政に限らずにいろんな政策分野に広げていくということが強調されていて、第2期創生計画は第1期創生計画とは違うところを目指しておられるということを感じた。いろんな政策分野に広げるといえることは、文化というのは、美術や音楽だけでなく、ものづくり、物事の決め方とか、全て文化と捉えることができると考えれば納得できる。

京都は文化都市の典型のように言われるが、市民一人当たりの文化予算は低い。そんな中でよくやっていると思うのは、京都にはお寺が数多くある、大学が多くあって京都の文化イメージを支えているが、税金は払ってくれない。そこでどうするかと言うと国や民間から調達する、民間といっても東京や大阪に比べて、巨大企業は少ない。ところが、中小の企業からびっくりするほど寄進、寄附がある。それでかろうじてできている面がある。それでも税収が増えない中で、京都＝文化とイメージされるようなまちであり続けるためには、市民ひとりひとりが次の世代をサポートしていく、その仕組みしかないのではないかと思っている。

芸術の担い手を育てるためには、子どものときに良い体験をする必要がある。邦楽を学べるのは東京芸術大学だけだが、その東京芸術大学が学生集めに苦労している。

また全国の芸術系大学の男子比率が激減していて一番高くて 2 割だ。女子大化していると言ってもいい。卒業しても食べていけないということが男子学生にプレッシャーを掛けている。まちの隙間に、たくさんアーティストや学者がいる。暮らしの中に、近所に、職人・芸術家・演奏家がいる。それが京都の姿であったと思うのだが、今、市民が里親みたいな気持ちになって、そういった人々を支えていくといった江戸時代までの京都の町衆のような精神が必要なのだと思う。

<委員>

とても行き届いた文言で、皆様に敬意を表して感謝申し上げます。本当に行き届いた文言で隅々まで書かれ、ポイントを押えていると思う。「五感で感じる京都」というのが一番分かりやすいと思った。

古典芸能の世界で、習い事が少なくなっている。体験する機会は多くなっているが、そこから先がなかなか進まない。私たちの責任でもあるが、サポートする人がいないとものができないということはどの世界でも同じだ。欠席された委員の御意見に「裾野を」という言葉があったが、そういう意味合いも含まれているのかなと感じた。

私どもは日々現実的なことに直面しており、皆さんの大きな発想とまったく逆行しており、お恥ずかしいことだが、どこかで風穴を空けなければと思う。お話を聞かしていただくだけでも、大変良かったと感じている。

<委員>

30 年以上京都に住んで、私の故郷になってしまった。京都の人と結婚して、西陣の町家に住み、狂言の研究をしている。私のように長く京都に住んでいる外国人が何百人というと思う。アーティスト・イン・レジデンスなどで短期的に京都に来る外国人ではなく、ずっと京都に住んでいる外国人の知識、ノウハウをもう少し芸術コーディネーターとして活かせば、京都の国際的な側面も見えてくると思う。

<副会長>

最初に基本方針、方向性を読んだときに、これ以外ないだろう、と思った。基本的に京都市が持つべき姿勢として重要なものだと思う。私が度々指摘したせいかどうか、34～41 ページに既存の施設の状況について書き加えてある。既存の施設のいろいろな問題点が浮かび上がっている。京都市美術館が改装して問題が解決したとしても、例えば考古資料館や歴史資料館にはまだまだ問題があって、地味なところに光が当たらないといった問題がある。ただ、残念ながら個々の説明文は本気で書けていない。バランスを取っただけの文章になっている。これは創生計画を提示した上で、もう一度それぞれの施設の現場の学芸員なり、次のビジョンを考えている人間が書くべきところだと思う。

京都市としては地道に少しずつ積み上げていくということが大事だと思う。この間、美術分野では、財界の支援でパラソフィアを開催し、来年は東アジア文化都市と、京都市が文化芸術のステージになる、外国から、全国から憧れられるステージであるという面はあるので維持していかなければならないと思う。

私自身は京都出身ではないが、もう長く京都に住んでいる。私の生まれた町がその後、辿った姿を見ると、やはり京都は特別な町だと思う。規模は小さいけれど、次から次へと新しい芸術が生まれてくる、そういった環境を持っているのだと思う。

<委員>

43 ページの「文化庁のサテライト機能」という表現に疑問を持った。普通に読むと、文化庁が本部で京都市が支部だというイメージを持つのではないかと危惧する。文化庁がやろうとしていることに、京都市も連携するというのであれば、書きこんでもいいと思うが、サテライトという言葉が一人歩きするのではないかと思う。

<事務局>

文化庁移転の概要の中で、文化庁側の表現として京都のまち全体をサテライトにという表現があり、文化庁のオフィスを今どこにするか検討中だが、オフィスとは別に京都のまちの中に様々な文化芸術の場があり、そういう場にも文化庁のスタッフに入ってもらっていただき、身を持って体験してほしいという思いで書いたものだ。

<政策部会長>

私どもで取り込みきれなかった、すばらしい様々な視点を御提供いただいた。京都のステージ性ということ、持続可能性という言葉にも、まったくその通りだと思った。

今日の色々な御意見を伺う中で、またこれまでの部会の議論を通じて改めて学んだことは、京都は「文化ファースト」と堂々と言える、そのことに合意がとれている、それを本気で進められる、文化政策の大実験を打ち出すことのできるまちだということだ。

<委員>

方向性 3 にもあるが、文化芸術を経済・観光に波及させるということを明確に示している、それを堂々と打ち出しているのはすごいと思う。経済活動の中で文化芸術を守っていく仕組みが必要だと思う。それであれば、45 ページに内外との文化交流についての記述があるが、観光誘致、観光情報を一元化していく中で、DMO (Destination Management Organization) を各都市がしっかり担っていくという流れがあり、京都市も打ち出されてもいいのかなと思う。また、MICE の推進というのも、キーワードになってもいいと思う。

<委員>

「京都文化芸術プログラム 2020+」の「公共施設への和室設置」については、和室の活用の推進、活性化が先だと思う。その中で新しい和室が出来てもいいとは思いますが。国際交流会館や水族館の向こうにある緑の館の和室は本当に活用されているだろうか。行政が作られた和室で全国に使える和室空間がある、京都では、京間の畳のサイズにもこだわりきっちりした和室の設置が必要だが、その前に、その空間を使いこなすソフト力をしっかり育む事こそが重要だ。

<事務局>

この部分の趣旨としては、暮らしの文化に関連して、最近の住居には畳の部屋がない、畳のない所に、着物もない、伝統もない、文化もないということで、どうやって子ども達に伝統的な文化を伝えるのか憂いている。決してハコモノを作るのではなく、少なくとも行政の施設には畳の空間を設置し、和の文化を振興しようという趣旨だ。

<委員>

冒頭に発言して、政策部会の皆さんに何のお礼も申し上げず失礼した。未来について考える場であるが、文化の世界で現状が大変な危機的な中で私自身疲れており、未来に向かって考える余裕がなくなっている。ただ現状を生き生きとすることこそが未来を作ることにつながると思う。

<会長>

スポーツ・文化・ワールドフォーラムの際に、二条城の場であのようなことが出来たということは、単なるイベントというのではなく、寛永文化を脈々と守ってきた人がいたということ、京都の文化の広さがあり、広さが深さにつながっていくというような好循環が形成されているということだと思った。

修正案の作成については、政策部会長とも相談しながら、私と政策部会の皆様と事務局のほうに一任ということでご異議ないか。

<委員一同> 拍手で承認